

日本人成人における嫌悪対象者の 「社会的アレルギー」の特徴および分類の試み

An Exploratory Study on the Characteristics and Classification of Social Allergens Among Japanese Adults

高瀬加容子*, 河野和明**, 羽成隆司***, 伊藤君男**

Kayoko TAKASE, Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI, Kimio ITO

キーワード：対人嫌悪，社会的アレルギー，日本人成人

Keywords：interpersonal dislike/aversion, social allergen, Japanese adults

要約

継続的な関係において対人嫌悪を喚起する行動特徴や個人特性である社会的アレルギーの特徴と内容を明らかにするため、20歳から69歳までの日本人成人800名を対象としてWeb調査を実施した。先行研究に準じた尋ね方では、回答者の約4割のみが社会的アレルギー対象者がいると回答した。嫌悪対象者の性を分析したところ、男女とも同性嫌悪傾向が見られた。回答者の職業および嫌悪対象者との関係についても頻度分析がなされた。代表的な社会的アレルギーを表した項目について因子分析を行ったところ、がさつな習慣（uncouth habits）因子、侵入的行動（intrusive behavior）因子、無能怠慢特性因子の3因子が得られた。侵入的行動は恐怖、軽蔑、嫌悪、怒りのそれぞれと有意な正の相関を示したが、がさつな習慣と嫌悪および怒り、無能怠慢特性と恐怖は、それぞれ有意な相関を示さなかった。

Abstract

The present study aimed to elucidate the characteristics and nature of social allergens—behavioral tendencies or personal traits that evoke interpersonal aversion within ongoing relationships. A web-based survey was conducted with 800 Japanese adults (ages 20–69). Using procedures consistent with previous research, approximately 40% of respondents reported having an individual who elicited a social allergy reaction. An analysis of the target's gender indicated a same-gender aversion tendency among both male and female participants. Frequency analysis was also conducted regarding respondents' occupations and their

relationship with the target persons. A factor analysis of representative items describing social allergens yielded three factors: uncouth habits, intrusive behavior, and incompetence/laziness. Intrusive behavior showed significant positive correlations with fear, contempt, disgust, and anger. However, uncouth habits did not show significant correlations with disgust and anger, and incompetence/laziness did not show significant correlations with fear.

問題

人間関係において、当初はさほど気にならなかった相手の言動が、繰り返し経験されるうちにその人に対する強い不快感や嫌悪感へと発展することがある。Cunninghamら(1997)は、これを、生体が抗原を反復摂取することで抗原抗体反応が生じて病的症状が現れる現象であるアレルギーになぞらえ、「社会的アレルギー (social allergy)」と呼んだ。この反応を生起させるもの、すなわち社会的アレルギー (social allergen) は、「客観的な第三者にとってはそれほど嫌悪的でない、他者によってなされる不快な行動ないし状況」と定義される (Cunningham et al., 1997)。そして、これによって生じた他者の社会行動に対する否定的感情を含む過敏性を社会的アレルギーと呼ぶ (O'Connor, 2011)。このような、経験の累積による強い嫌悪感情は、対人感情や対人関係を理解する上で重要な現象であり、親密で重要な関係性においても生じ得ることから、関係の破綻を説明する要因のひとつと考えられる (Cunningham et al., 2005)。

社会的アレルギーについてはこれまで、行為者の意図性 (intentionality) と個人指向性 (personalism) による分類が提唱されている (Cunningham et al., 1997, 2005)。意図性とは、嫌悪対象者が相手の否定的反応を意識しているか否かを指し、個人指向性とは嫌悪対象者の行動や特性が特定の個人に向けられているか否かをいう。そして、これらの有無によって4種のカテゴリが構成された。意図的かつ個人指向的な行動は侵入的行動 (intrusive behavior) といわれ、たとえば、頻繁に批判する、正当な権限がないのに命令する、威嚇的な態度で振る舞う、などがこれに当たる。非意図的かつ個人指向的な行動は無配慮な行為 (inconsiderate acts) であり、たとえば、不相応な注目を期待する、待ち合わせにいつも遅れる、会話で自己中心的な態度をとる、といったことが該当する。意図的かつ非個人指向的な行動は規範違反 (norm violations) と名付けられ、具体的には、交通ルールに違反する、浮気をする、仕事を避ける、仕事や学校で努力しない、ギャンブルをする、などがある。非意図的かつ非個人指向的な行動は、がさつな習慣 (uncouth habits) と呼ばれ、身だしなみがだらしない、食事の場でマナーが悪い、清潔に配慮しない、などがある。

O'Connor (2011) に記述されている大学生 (平均年齢21歳) を対象とした調査によれば、社会的アレルギーの主な対象者は、友人または知人 (67%)、家族 (15%)、同僚 (9%) であった。ほとんどの回答者は対象者との付き合いが長く (平均5.8年)、19%の回答者が対象者と同居してい

た。対象者と会う頻度も高く、週平均 2.2 時間を対象者と過ごしていた。交際関係を持つ男女を対象に、仮想的なパートナーの行動や、実際のパートナーによる社会的アレルギーの経験を調査した研究 (Cunningham et al., 2005) では、社会的アレルギーの頻度は関係の時間経過とともに増加し、また、男性はがさつな習慣や規範違反を、女性は無配慮な行為をより強く行う傾向が示されている。さらに、相手が社会的アレルギーとなる行動を頻繁に行うほど否定的感情は増幅し、そうした経験は関係満足度の低下や最終的な関係解消と有意に関連することが報告されている。これらの知見は、社会的アレルギーが恋愛関係を含む親密な対人関係に深刻な影響を及ぼし得ることを示唆している。また、嫌悪反応は対象者を目の前にした数分以内に生じることが多く、一度引き起こされた否定的感情は 3 時間程度持続する (Cunningham et al., 1997)。このことから、社会的アレルギーは単発的な不快経験にとどまらず、即時的に喚起され長く持続する強固な感情現象であることが示唆される。

しかしながら、先行研究は欧米の限られたものであり、日本人を対象とした系統的な調査研究は少ない。本邦においては、対人嫌悪を扱った研究は見られるものの (たとえば、高瀬・河野, 2023, 2024; 河野・羽成・伊藤, 2015a, 2015b, 2017)、社会的アレルギーの概念を前提とした研究はほとんどなされていない。そのため、日本人を対象とした社会的アレルギーの様相やその具体的内容、社会的アレルギーの分類については十分に検討されていない。以上を踏まえ、本研究では、日本人を対象として、まず社会的アレルギーの具体的特徴を収集する。次に、従来の 4 分類に典型的とされる行動や特性記述に対して評定を求め、因子分析によって因子構造を明らかにし、社会的アレルギーの分類を試みる。これら一連の分析によって、日本人成人における社会的アレルギーの実態を明らかにする。

方法

調査参加者および手続き

本調査は、調査会社に委託し、2025 年 1 月にインターネット調査 (Web 調査) として実施した。対象者から 20~60 代の各年代 (20-29 歳, 30-39 歳, 40-49 歳, 50-59 歳, 60-69 歳) に、男性 80 名、女性 80 名ずつが割り当てられ、計 800 名 (男性 400 名、女性 400 名) の回答が収集された。回答者の平均年齢は 44.79 歳 ($SD = 13.85$) であった。調査はオンライン上の質問票により行われ、参加者は調査会社のモニター登録者から無作為に抽出され、調査への同意を得た上で回答を行った。回答はすべて無記名で行われた。

調査内容

本調査で用いた質問票は、自由記述項目を含む以下の諸項目から構成されていた。これ以外にもいくつかの尺度等を投入したが、本研究では言及しない。

基本属性：年齢，性別，職業〔14 カテゴリ：会社勤務（一般社員），会社勤務（管理職），会社経営（経営者・役員），公務員・教職員・非営利団体職員，派遣社員・契約社員，自営業（商工サービス），農林漁業，専門職（法務・経営関連），専門職（医療関連），パート・アルバイト，その他の職業，専業主婦・主夫，学生，無職〕。

嫌悪対象者の指定：Cunningham et al. (1997) に準じ，「その人がそばにいるとあなたが嫌な気持ちになる人についてお聞きます。たとえその人がわざとあなたを嫌な気持ちにするつもりがなくても，あなたの気分を悪くするような人です。その人に対してあなたがとても強い感情を抱いているため，あなたがイライラしたり，気分が害されたり，身体的な変化が生じたりするような状況についてお聞きます。」と前置きし，該当する人がいるか否かを尋ねた。いる場合（以下，「嫌悪対象者あり群」）には，その人数を記載するよう求めた。

評定対象者に関する情報：前項で想起を求めた対象人物のうち，最も強い感情を感じる人1名について評定を求めた。前項で「いない」と回答した場合（以下，「嫌悪対象者なし群」）には「嫌いでも好感度が最も低い人」を対象とするよう指定した。すなわち，以降の評定では回答者が「嫌な気持ちになる」人物として想起した人物と「好感度が最も低い」人物のいずれかが対象となった。以降，この人物を評定対象人物と呼ぶ。評定対象人物の諸属性を取得するため，性別，年齢，関係16カテゴリ（友人，同僚，部下・目下の人，顧客，上司や先生，知り合い，配偶者・交際相手，自分の実の子ども，自分の義理の子ども，自分の実の親，自分の義理の親，自分の実のきょうだい，親戚，近隣住民，SNSなどだけで付き合いのある人，その他），同居の有無，知り合ってから期間，嫌悪感情を抱くようになった時期，現在の会う頻度・会っている時間について尋ねた。

評定対象人物への感情：評定対象人物に対する感情の基本的特徴を測定するため，齊藤（1990）を参考に2種類のポジティブ感情（「尊敬」「愛情」）と4種類の否定的感情（「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」）を取り上げた。各感情について7件法（1 = まったく感じない～7 = 非常に感じる）で評定を求めた。呈示順はランダム化されていた。

社会的アレルゲン項目の評定：社会的アレルゲンの内容を項目化するため，Cunningham ら（1997, 2005）で例示されている社会的アレルゲンの具体的記述を抜き出した。内訳は，侵入的行動（意図的かつ個人指向的）14例，無配慮な行為（非意図的かつ個人指向的）15例，がさつな習慣13例（非意図的かつ非個人指向的），規範違反（意図的かつ非個人指向的）12例であった。各項目を和訳した後，意味的な重複や日本人における適用を考慮して項目を取捨した上，表現を理解しやすく修正して計27項目（侵入的行動6項目，がさつな習慣7項目，無配慮な行為6項目，規範違反8項目）を作成した。調査では，評定対象人物についてこれらの項目に対する評定を求めた。呈示順はランダム化されており，回答には7件法（1 = まったく当てはまらない～7 = 非常に当てはまる）を用いた。

倫理的配慮

本研究計画は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得て実施された（受付番号 2024-17）。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意の上で自発的に調査に参加していた。また、本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

結果

嫌悪対象者の有無と性別

クロス集計の結果、男性では嫌悪対象者が「いる」と回答した者は163名（40.8%）、「いない」と回答した者は237名（59.3%）であった。女性では「いる」と回答した者は178名（44.5%）、「いない」と回答した者は222名（55.5%）であった。全体として、嫌悪対象者が「いる」と回答した割合は42.6%、「いない」と回答した割合は57.4%であった。 χ^2 検定の結果、性による嫌悪対象者の有無の割合には有意な差は認められなかった（ $\chi^2(1) = 1.15, p = .28$ ）。嫌悪対象者の有無は性別によって有意に異ならず、男女ともおおむね4割程度が嫌悪対象者の存在を意識しているといえる。

次に、Cunninghamら（1997, 2005）の研究に準じた回答者（社会的アレルギーの対象者の存在を自覚する回答者）に基づいて性差を検討するため、嫌悪対象者あり群（ $n = 341$ ）について回答者の性別と嫌悪対象者の性別との関連を検討した。クロス集計の結果、男性回答者では嫌悪対象者として男性を挙げた者が128名（78.5%）、女性を挙げた者が35名（21.5%）であった。一方、女性回答者では男性を挙げた者が76名（42.7%）、女性を挙げた者が102名（57.3%）であった。全体として、嫌悪対象者が男性である割合は59.8%、女性である割合は40.2%であった。

χ^2 検定の結果、回答者の性別と嫌悪対象者の性別には有意な関連が認められた（ $\chi^2(1) = 45.45, p < .001$ ）。標準化残差を確認したところ、男性回答者では嫌悪対象者として男性を挙げる割合が期待度数より有意に高く（標準化残差 3.09）、女性を挙げる割合は有意に低かった（標準化残差 -3.77）。一方、女性回答者では嫌悪対象者として女性を挙げる割合が有意に高く（標準化残差 3.61）、男性を挙げる割合は有意に低かった（標準化残差 -2.95）。すなわち、回答者の性別によって嫌悪対象者の性別には偏りが見られ、男女とも同性嫌悪傾向が認められた。

回答者の職業カテゴリ

設定した職業カテゴリについて、「会社勤務（一般社員）」と「会社勤務（管理職）、会社経営（経営者・役員）」を合わせて「会社勤務（一般社員・管理職等含む）」、「自営業（商工サービス）」と「農林漁業」を合わせて「自営業（商工サービス）・農林漁業」、「専門職（法務・経営関連）」と「専門職（医療関連）」を合わせて「専門職（弁護士・税理士・医療関係等含む）」、「パート・アルバイト」と「その他の職業」を合わせて「パート・アルバイト・その他の職業」と再カテゴリ化し、

計9カテゴリによって分析を行った。本調査に参加した回答者800名(男性400名,女性400名)の職業カテゴリ分布を、嫌悪対象者あり群となし群ごとにTable 1に示す。最も多かった職業カテゴリは「会社勤務(一般社員・管理職等含む)」で311名(38.9%)であった。次いで「パート・アルバイト・その他の職業」が136名(17.0%),「専業主婦・主夫」が95名(11.9%),「無職」が87名(10.9%)と続いた。

職業カテゴリと「嫌悪対象者の有無」との関連を検討するために、 9×2 の分割表に対し独立性の χ^2 検定を行った。その結果、嫌悪対象者の有無の偏りは有意だった($\chi^2(8) = 16.21, p = .040$)。標準化残差を算出したところ、「会社勤務」および「専業主婦・主夫」カテゴリにおいて、 $|1.96|$ を超える有意な偏りが認められた。具体的には、「会社勤務(一般社員・管理職等含む)」では「嫌悪対象者あり」が期待度数より有意に多く(標準化残差1.97),「嫌悪対象者なし」は有意に少なかった(標準化残差-1.97)。一方、「専業主婦・主夫」では「嫌悪対象者あり」が有意に少なく(標準化残差-2.10),「嫌悪対象者なし」が有意に多かった(標準化残差2.10)。

全体的に、業務や対人関係の自由度が比較的高いカテゴリにおいて嫌悪対象者を意識しない人が多い傾向がうかがわれるが、対人嫌悪と職業特性との関係を明確にするには、より広範な調査が必要と考えられる。

Table 1 回答者の職業カテゴリと度数：()は列相対度数

職業カテゴリ	嫌悪対象者あり	嫌悪対象者なし	合計
会社勤務(一般社員・管理職等含む)	146(42.8%)	165(36.0%)	311(38.9%)
公務員・教職員・非営利団体職員	21(6.2%)	21(4.6%)	42(5.3%)
派遣社員・契約社員	25(7.3%)	21(4.6%)	46(5.8%)
自営業(商工サービス)・農林漁業	10(2.9%)	23(5.0%)	33(4.1%)
専門職(弁護士・税理士・医療関係等含む)	8(2.4%)	18(3.9%)	26(3.3%)
パート・アルバイト・その他の職業	58(17.0%)	78(17.0%)	136(17.0%)
専業主婦・主夫	31(9.1%)	64(13.9%)	95(11.9%)
学生	12(3.5%)	12(2.6%)	24(3.0%)
無職	30(8.8%)	57(12.4%)	87(10.9%)
合計	341(100.0%)	459(100.0%)	800(100.0%)

嫌悪対象者との関係

以降では、前述のように先行研究(Cunningham et al., 1997, 2005)の基準に準じた回答者によって分析するため、嫌悪対象者あり群の回答に基づいて分析する。嫌悪対象者(嫌悪対象者あり群における評定対象人物)との関係16カテゴリについて、「知り合い」、「近隣住民」、「SNSなどでだけで付き合いのある人」を合わせて「知り合い・近隣住民・SNS関係」とし、「顧客」、「上司

や先生」を合わせて「上司や先生・顧客」とし、「自分の実の子ども」、「自分の義理の子ども」、「自分の実の親」、「自分の義理の親」、「自分の実のきょうだい」、「配偶者・交際相手」、「親戚」を合わせて「家族・親戚・配偶者・交際相手」と再カテゴリ化し、計7カテゴリによって分析を行った。嫌悪対象者あり群における回答者の男女別度数を Table 2 に示す。男性は「同僚」(32.5%) および「上司や先生・顧客」(28.2%) が特に高く、職場における縦横関係での嫌悪対象が6割以上を占めた。一方、女性では「家族・親戚・配偶者・交際相手」(27.0%) に次いで、「同僚」(26.4%)、「知り合い・近隣住民・SNS関係」(14.0%) が高い割合を示し、職場外・私的領域の関係が相対的に多かった。

男性と女性における嫌悪対象者カテゴリの分布の違いを検討するために、 7×2 の分割表に対し独立性の χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(6) = 32.42, p < .001$)。標準化残差を確認したところ、男性は「上司・先生・顧客」を嫌悪対象とする割合が有意に高く(標準化残差 = 3.66)、女性では有意に低かった(標準化残差 -3.66)。一方、「家族・親戚・配偶者・交際相手」を嫌悪対象とする割合は女性が有意に高く(標準化残差 4.05)、男性では低かった(標準化残差 -4.05)。

Table 2 嫌悪対象者との関係7カテゴリについて男女ごとに示した度数：()は列相対度数

関係カテゴリ	男性	女性	合計
友人	7(4.3%)	15(8.4%)	22(6.5%)
同僚	53(32.5%)	47(26.4%)	100(29.3%)
部下・目下の人	15(9.2%)	8(4.5%)	23(6.7%)
上司や先生・顧客	46(28.2%)	22(12.4%)	68(19.9%)
知り合い・近隣住民・SNS関係	14(8.6%)	25(14.0%)	39(11.4%)
家族・親戚・配偶者・交際相手	16(9.8%)	48(27.0%)	64(18.8%)
その他	12(7.4%)	13(7.3%)	25(7.3%)
合計	163(100.0%)	178(100.0%)	341(100.0%)

知り合ってから期間・嫌悪開始時期・現在の出会う頻度と時間

嫌悪対象者あり群では、評定対象人物と知り合ってから期間が中央値 7.0 年(平均 13.83 年, SD 14.94)、嫌悪感情を抱くようになった時期は出会い後中央値 3.0 年(平均 8.03 年, SD 11.04)、現在の出会う頻度は中央値 週 2 回(平均 3.73 回, SD 7.06)、一緒に過ごす時間は 1 日あたり中央値 1.5 時間(平均 3.33 時間, SD 4.13)であった。

社会的アレルゲン項目の評定の因子分析

定量データに基づいてCunninghamら(1997, 2005)の4分類の当てはまりの成否を検討するため、嫌悪対象者あり群について確認的因子分析(最尤法)を実施した。「侵入的行動」因子6項目、「がさつな習慣」因子7項目、「無配慮な行為」因子6項目、「規範違反」因子8項目について、各因子からそれぞれの観測変数が影響され、因子間相関のあるモデルで分析した。その結果、適合度指標はCFI=.78, TLI=.76, RMSEA=.12; 90% CI [.11, .12], SRMR=.09となり、モデルは支持されなかった。

そこで、より妥当性の高い因子構造によって社会的アレルゲンを分類するため、各項目の評定に対して最尤法による探索的因子分析(プロマックス回転)を行った。スクリープロットおよび固有値の減衰に基づき、3因子解を採用した。寄与率は第1因子が38.7%、第2因子が10.7%、第3因子が7.0%であり、累積寄与率は56.4%であった。因子間相関は中程度から高く、第1因子と第2因子の相関は $r=.549$ 、第1因子と第3因子の相関は $r=.612$ 、第2因子と第3因子の相関は $r=.473$ であった。パターン行列をTable 3に示す。

第1因子には、「ギャンブルをし過ぎる」、「ゲップをしたりおならをしたりする」、「いつも身体の距離を近づけすぎる」、「浮気っぽい行動をする」、「だらしない服装をする」などが高く負荷した。因子負荷量上位項目について見ると、先行研究(Cunningham et al., 1997, 2005)のカテゴリにおける「規範違反」、「無配慮な行為」、「がさつな習慣」に含まれると想定していた項目が混在していた。しかし、いずれもマナーからの逸脱や不衛生に関連していると考えられたため、本因子は先行研究の「がさつな習慣(uncouth habits)」におおむね対応すると解釈し、「がさつな習慣」因子と命名した。

第2因子には、「自分の方があなたより上だという態度を取る」、「あなたに対して押しつけがましい行動をする」、「人に何かするように要求してくる」、「あなたに対して批判的過ぎる」、「あなたに対して配慮のない行動をする」などが高く負荷した。これらは対人関係における支配性や自己中心性を反映していると考えられ、本因子は先行研究の「侵入的行動(intrusive behavior)」におおむね対応すると解釈し、「侵入的行動」因子と命名した。

第3因子には、「しなければいけない仕事や作業をちゃんとしない」、「やるべき仕事をしない」、「仕事や作業をする能力が低い」、「ルールや規則を守らない」が高く負荷した。これらは役割遂行や責任の欠如を反映しており、先行研究のカテゴリに直接の対応づけは困難であったため、独自に「無能怠慢特性」因子と命名した。これらから、先行研究の「規範違反」および「無配慮な行為」は本研究では独立因子としては現れず、ここで採用した3因子に分配されたといえる。

各因子に.40以上の負荷量を示し、かつ他の因子に.30以上の負荷をもたない項目を抽出し、「がさつな習慣」「侵入的行動」「無能怠慢特性」の下位尺度項目と見なした。この基準では、「侵入的行動」因子からは10項目が採用されるが、「がさつな習慣」因子と項目数をそろえるため9

項目のみの採用とした。その後、各因子における合計得点を算出した。この合計得点を次に述べる相関分析に用いた。各尺度の α 係数は「がさつな習慣」.892 (9項目), 「侵入的行動」.886 (9項目), 「無能怠慢特性」.889 (4項目)であった。

Table 3 社会的アレルゲン項目のパターン行列 (最尤法, プロマックス回転)

項目	因子			共通性
	F1	F2	F3	
ギャンブルをしすぎる	.841	-.123	-.077	.545
ゲップをしたりおならをしたりする	.799	-.011	-.118	.528
いつも身体の距離を近づけすぎる	.790	.006	-.128	.522
浮気っぽい行動をする	.757	-.029	-.024	.529
だらしない服装をする	.745	-.141	.203	.659
身だしなみが不潔	.677	-.112	.234	.611
約束の時間にいつも遅れる	.651	.010	.060	.483
お金のルーズである	.629	.050	.047	.473
あなたに愚痴をこぼすことが多い	.460	.125	-.128	.219
自分の方があなたより上だという態度を取る	-.203	.835	-.034	.535
あなたに対して押しつけがましい行動をする	-.021	.794	-.054	.577
人に何かするように要求してくる	-.130	.776	.046	.537
あなたに対して批判的過ぎる	-.105	.737	-.079	.431
あなたに対して配慮のない行動をする	-.211	.650	.218	.442
あなたに対して無遠慮なことを聞いてくる	.096	.643	-.038	.464
命令する立場にないのに命令する	.176	.605	-.091	.451
自慢をしすぎる	.117	.587	-.008	.428
不適切な個人的質問をする	.239	.582	-.003	.546
過剰にうわさ話をする	.185	.464	.022	.359
過剰にほめてもらいたがったり慰めてもらいたがったりする	.321	.416	-.065	.376
言葉づかいが汚い	.296	.383	.118	.459
しなければいけない仕事や作業をちゃんとししない	-.127	-.040	.981	.795
やるべき仕事をしない	-.110	-.008	.959	.796
仕事や作業をする能力が低い	.043	-.040	.785	.629
ルールや規則を守らない	.245	.028	.567	.575
習慣や癖が無作法である	.236	.250	.300	.430
他人を騙したり嘘をついたりする	.282	.283	.270	.485

因子間相関

F1	
F2	.549
F3	.612 .473

相関分析

嫌悪対象者あり群について、回答者年齢、嫌悪対象者に対する6種の感情評定(尊敬・愛情・恐怖・軽蔑・嫌悪・怒り)、および社会的アレルゲン下位尺度3種(がさつな習慣, 侵入的行動, 無能怠慢特性)それぞれの得点の相関係数を男女別に算出した(Table 4)。

Table 4 回答者年齢, 6種の感情および社会的アレルギー3下位尺度の相関係数行列
(嫌悪対象者あり群): 上段は男性(n=163), 下段は女性(n=178)の相関係数

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1.回答者年齢									
2.尊敬	-.15								
	-.04								
3.愛情	-.12	.78**							
	-.11	.59**							
4.恐怖	-.11	.37**	.32**						
	.09	.04	.05						
5.軽蔑	.08	-.21**	-.21**	.06					
	.07	-.19*	-.14	.21**					
6.嫌悪	.10	-.22**	-.26**	.08	.53**				
	.05	-.21**	-.26**	.21**	.45**				
7.怒り	.20*	-.14	-.13	.17*	.63**	.67**			
	.05	-.05	-.02	.21**	.50**	.44**			
8.がさつな習慣得点	-.08	.10	.18*	.19*	.23**	.00	.11		
	-.19*	.02	.11	.22**	.16*	.05	.14		
9.侵入的行動得点	.01	-.09	-.06	.18*	.31**	.23**	.35**	.41**	
	.03	-.15*	-.08	.25**	.30**	.25**	.24**	.47**	
10.無能怠慢特性得点	.01	-.17*	-.09	.06	.38**	.24**	.31**	.55**	.37**
	-.20**	-.18*	-.12	.07	.32**	.23**	.31**	.57**	.41**

* $p < .05$; ** $p < .01$

男性では、尊敬と愛情の間に高い正の相関がみられた。これらの肯定的感情は、軽蔑、嫌悪と負の相関を示した。否定的感情間では、軽蔑・嫌悪・怒りに正の相関がみられた。また、尊敬および愛情と恐怖にも正の相関がみられた。女性でも、尊敬と愛情の間に正の相関がみられ、これらは男性と同様に、軽蔑、嫌悪と負の相関を示した。否定的感情間では、男性と同じく、軽蔑・嫌悪・怒りに正の相関がみられたことに加えて、恐怖と軽蔑および嫌悪にも正の相関がみられた。男性のみ、年齢と怒りに正の相関がみられた。

社会的アレルギー下位尺度間の相関は比較的高く、「がさつな習慣」「侵入的行動」「無能怠慢特性」の間に $r = .37 \sim .57$ の正の関連がみられた。また、これらは軽蔑・怒り・嫌悪と正の相関を示した。

男性では、がさつな習慣得点は愛情、恐怖および軽蔑と正の相関を示したが、嫌悪と怒りとは有意な相関を示さなかった。女性でも男性同様、恐怖、軽蔑と正の相関がみられたが、嫌悪や怒りとは有意な相関が示されなかった。一方、男性と異なり、年齢とは負の相関を示した。侵入的行動得点は男女ともに、怒り、軽蔑、嫌悪、恐怖の否定的感情すべてと正の相関がみられた。無能怠慢特性得点は、男女ともに、軽蔑、嫌悪、怒りと正の相関を示した。女性ではこの得点と年

齢との間に負の相関がみられたことが男性と異なる特徴であった。

考察

本研究は、日本人成人を対象に社会的アレルギーの存在とその特徴を明らかにすることを目的として実施された。明確に「嫌悪対象者がいる」とした回答者は約4割であった。嫌悪対象者ありとする回答者が半数に満たない点は先行研究 (Cunningham et al., 1997; O'Connor, 2011) と明らかに異なる。調査においては対人的な否定的感情を問うことになったため、社会的望ましさに関する文化的差異が嫌悪対象者の有無の回答に影響した可能性がある。日本人とアメリカ人では、感情表出の適切性に関する社会的な規範が異なっており、その結果、アメリカ人は否定的感情を含む感情表出の容認度が高いことが指摘されている (Chung, 2012)。そのため、アメリカ人は同様な否定的感情を喚起される対象者についても、日本人より嫌悪対象者として認知しやすい傾向があり、日本人は逆に認知を抑制する傾向があるのかもしれない。これらの点の検討は今後の課題と考えられる。

また、嫌悪対象者の性と回答者の性を分析すると、男性回答者は男性を、女性回答者は女性を嫌悪対象とする傾向が強いことが明らかとなった。この同性嫌悪傾向は男性においてより顕著であることが示された。このことは、大学生を対象とした先行研究 (河野・羽成・伊藤, 2017) でも指摘されている。同性嫌悪には、社会的比較 (Festinger, 1954) や生物学的な性選択 (Buss, 1988) の面から同性間に競争が生じやすいことが背景にあるものと思われる。特に男性は、性内競争が強くなりやすいため、同性間に軋轢が生じやすいと推測される。本研究の結果はこれを支持するものと考えられる。

職業カテゴリと嫌悪対象者の有無との関連を検討した結果、両者の間に有意な関連が認められた。会社勤務者では嫌悪対象者を有する割合が有意に高い一方、専業主婦・主夫では嫌悪対象者を有しない割合が有意に高いことが示された。この結果は、日常的に置かれる対人環境の職業カテゴリごとの性質が反映された可能性を示唆している。とくに会社勤務は、上下関係や同僚関係といった選択困難な対人関係の中で、長時間かつ反復的な相互作用が生じやすい環境であり、こうした条件が対人摩擦や嫌悪感情の形成を促進する要因となり得ると考えられる。

一方で、専業主婦・主夫では嫌悪対象者を有しない者が多かった点は、対人関係の選択性や裁量性の高さに関係している可能性がある。職業的役割に基づく強制的な対人接触が相対的に少ない場合、嫌悪感情が蓄積されるような反復的なストレス状況が生じにくいことが考えられる。また、自営業や無職、学生といったカテゴリでは明確な有意差は認められなかったが、これらの職業群は対人関係の構造や接触頻度が多様であるため、嫌悪対象者の有無に一貫した傾向が表れにくかった可能性がある。本研究の結果は、嫌悪感情の発生が個人特性のみならず、対人接触の強制性や関係の持続性といった環境要因に強く依存することを示唆するものである。

嫌悪対象者のカテゴリと性別の関連を検討した結果、両者の分布に有意な差が認められ、男性では「上司や先生・顧客」を嫌悪対象とする割合が有意に高く、一方で女性では同カテゴリが有意に低いことが示された。これに対し、女性では「家族・親戚・配偶者・交際相手」を嫌悪対象とする割合が非常に高く、男性では有意に低かった。このような結果は、嫌悪感情が生じやすい対人関係の領域が、男女で異なることを示している。すなわち、男性では組織内の上下関係や役割的非対称性を伴う関係が、女性では家庭内や親密圏における持続的な対人関係が、嫌悪感情の主要な文脈となりやすい可能性が考えられる。

これに関して、先行研究では、性によって経験されやすい対人ストレスの領域が異なることが示されている。職場領域では、男性は管理職比率や責任役割の偏在を背景として、上司との葛藤や支援欠如といった上下関係に基づく対人ストレスを経験しやすいことが報告されている(Nyberg et al., 2009)。一方、女性は育児・家事・介護など家庭内・親族関係におけるケア役割を担う割合が高く、家族成員との調整や葛藤に起因する心理的負担を抱えやすいとされている(Kessler et al., 1985; 杉浦ほか, 2004)。

本研究の相関分析の結果は、男女を問わず肯定的感情（尊敬・愛情）と否定的感情（軽蔑・嫌悪・怒り）に負の相関が見られた。嫌悪、怒り、軽蔑が互いに密接に結びついていることはしばしば言及されており（例; Haidt, 2003）、本研究の結果もこれを支持するものである。なお、男性において、尊敬・愛情と恐怖との間に有意な正の相関が見られたことは、たとえば厳しく強いリーダーシップを示す上司に対する感情などのように、対人嫌悪事態においては恐怖とポジティブ感情が併存する場合がありますを示すものと思われる。

因子分析の結果、Cunninghamら（1997, 2005）の4分類のうち、「がさつな習慣」「侵入的行動」に対応すると暫定的に解釈される2因子が得られたが、4因子構造は再現されなかった。先行研究の4分類には、対人嫌悪を誘発する他者の行動について、意図性と個人指向性の有無をその都度明確に弁別できないことが多いという問題点が指摘できる。今後、この分類の成否についてより詳細に検討するには、たとえば、特定のエピソードについて意図性と個別性をそれぞれ評定するといった方法を用いる必要があるものと思われる。

社会的アレルゲンの「がさつな習慣」は嫌悪・怒りといった敵意的感情と明確な正の相関を示さなかった。また、男性において愛情と正の相関を示した。このことは、がさつさ・不作法・不潔などは、不快であるものの、対象者への強い敵意や攻撃性を喚起しにくいアレルゲンである可能性を示している。「がさつさ」は、他の2因子と異なり、評価者に直接的な被害を与えるものとは限らない。そして、一部の状況では率直さや飾らなさとしてポジティブに評価されることがある。これらのことから嫌悪対象者の性格や行為に対する本質的な否定につながりにくく、その都度の断片的な不快さの問題として知覚される傾向があるものと思われる。

社会的アレルゲンの「侵入的行動」は、男女ともに嫌悪・怒り・軽蔑・恐怖と正の相関を示し

た。これは、侵入的行動が他者の自律性を侵害し、社会的ストレス・心理的圧迫の発生源となるため、複数の否定的感情を同時に引き起こしやすい特徴を持つことを示す。

社会的アレルギーの「無能怠慢特性」の評定は、恐怖との相関がない点が「侵入的行動」と異なる点であった。無能怠慢特性は不快であるものの、対象人物を能力的に下位と見なしており、脅威と認識する側面が少ないものと解釈される。

また、年齢との関連は概して弱く、感情反応やアレルギー知覚が世代要因よりも対人経験や個人特性によってより影響されることが示唆される。一方、加齢とともに、女性では「がさつな習慣」および「無能怠慢特性」の得点が低下することから、他者の嫌悪的な特徴に対する認知ないし感受性の低下が生じている可能性がある。すなわち、女性は年齢とともに部分的に他者に寛容になる傾向を持つのかもかもしれない。これに対し男性では、加齢に伴う怒りの上昇傾向がみられ、ネガティブな感情反応が高まる可能性が示唆された。対人嫌悪における認知的側面と感情的側面の年齢変化にどのような性差があるかについては、今後、より詳細な検証が必要と考えられる。

以上のように、本研究では、日本人を対象に社会的アレルギーの特徴を明らかにし、さらに因子分析によってその内容の分類を試みた。社会的アレルギーの研究は、職場や学校など日常的な人間関係において、累積的な嫌悪感情の予防や緩和策を検討する上で有益な知見を提供する可能性がある。今後は、他の対人嫌悪研究の知見とあわせて社会的アレルギーの内容をより包括的に検討するとともに、肉親や配偶者といった身近な対象人物について社会的アレルギーと対人感情との関係を明らかにしていくことが期待される。

なお、本研究は横断的調査に基づいた相関研究であり、社会的アレルギーの形成過程や時間的推移を直接捉えることができない。因果関係の解明を含む今後の詳細な検討のためには、縦断的データや日誌法の導入によって、累積的に嫌悪感情の動態を明らかにすることが課題となろう。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 (JP25K06720) の助成を受けた。

引用文献

- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015a. 対人嫌悪の理由と対処の関係－被嫌悪回避傾向を考慮して－. 東海学園大学研究紀要, 20, 127-137.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015b. 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究, 24, 95-101.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2017. 日本人大学生における対人嫌悪に関する記述統計と性差. 東海学園大学研究紀要, 22, 80-90.
- 齊藤勇, 1990. 対人感情の心理学. 誠信書房.
- 杉浦圭子, 伊藤美樹子, 大塚真理, 三上洋, 2004. 在宅高齢者を介護する家族介護者の介護負担感と抑うつ状

- 態—性差に着目して—。日本公衆衛生雑誌, 51(4), 240-249.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2023. 一般的な対人嫌悪傾向を測定する試み。東海学園大学研究紀要, 28, 31-44.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2024. 看護師における対人嫌悪傾向とストレス反応との関連。東海学園大学研究紀要, 29, 17-25.
- Buss, D. M., 1988. The evolution of human intrasexual competition: Tactics of mate attraction. *J Pers Soc Psychol* 54:616-628.
- Chung, J. M., 2012. The contribution of self-deceptive enhancement to display rules in the United States and Japan. *Asian J Soc Psychol* 15:69-75.
- Cunningham, M. R., Barbee, A. P., & Druen, P. B., 1997. Social allergens and the reactions that they produce: Escalation of annoyance and disgust in love and work. In Kowalski, R. M. (Ed.), *Aversive interpersonal behaviors* (pp.190-215). New York: Plenum.
- Cunningham, M. R., Shamblen, S. R., Barbee, A. P., & Ault, L. K., 2005. Social allergies in romantic relationships: Behavioral repetition, emotional sensitization, and dissatisfaction in dating couples. *Pers Relatsh* 12:273-295.
- Festinger, L., 1954. A theory of social comparison processes. *Hum Relat* 7:117-140.
- Haidt, J., 2003. The moral emotions. In Davidson, R. J., Scherer, K. R., & Goldsmith, H. H. (Eds.), *Handbook of affective sciences* (pp. 852-870). Oxford: Oxford University Press.
- Kessler, R. C., McLeod, J. D., & Wethington, E., 1985. The costs of caring: A perspective on the relationship between sex and psychological distress. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (Eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications* (pp.491-506). Springer.
- Nyberg, A., Alfredsson, L., Theorell, T., Westerlund, H., & Vahtera, J., 2009. Managerial leadership and ischaemic heart disease among employees: The Swedish WOLF study. *Occup. Environ. Med*, 66: 51-55.
- O'Connor, B. P., 2011. Social allergens. In Horowitz, L. M. & Strack, S. (Eds.), *Handbook of interpersonal psychology: Theory, research, assessment, and therapeutic interventions* (pp.269-280). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.